
● 「BLUE Clover PROJECT」

「～女3と男1で美人ヨガインストラクター女子大学生をスペズレ●プする5P～」



監督脚本・制作編集 : Yotsuba Aoi

女性セリフ監修：ruote

●STORY

自宅に有るヨガ教室でインストラクターをしている女子大生の『松前空』は、3人の女性を招いてレッスンをしていた。

休憩中に『小出楓』から差し出されたハーブティーを飲んだ空は眠ってしまう。

空が目覚めると、なぜか卑猥な姿をしている3人の姿。

そして見慣れない男が目の前に居た。

男性が主導の強姦ではなく、女性がノンケの女性を犯すという4Pに、男性を巻き込んだ「スペレズ」ジャンル作品です



本編

TRUCK 1 PROLOGUE

TRUCK 2 PLAY

TRUCK 3 END

BONUS TRUCK 4 公式「MAD」『もしも、先生が貴男だったら』

TRUCK 1 PROLOGUE

小出 楓：

「この度はご購入 誠に有難うございます。 私は「小出楓」と申します」

高松 響：

「同じく「高松響」です」

大島 雪：

「おおしま大島雪です・・・早速ですが、貴男はエッチな気持ちになりたくて、聴いているんですよね？ それなら・・・オチンチンの準備はもう出来ていますか？」

大島 雪：

「これは、聞いてくれている貴男に、絶倫気分を味わって貰うための、音声作品です」

小出 楓

「本編では、4人の美女との濃厚でハードなハーレムタイムをお楽しみ頂けます」

高松 響：

「登場する男は貴男だけ、登場するメスは全部、貴男の物です」

大島 雪：

「これから、今回のターゲットの、美人ヨガインストラクターの、先生を、めちゃくちゃにしたいと思います お手伝いしてくれますよね？」

小出 楓

「まだ若い22歳」

高松 響：

「ヨガの授業が終わったばかりの汗だくショーツ ♥」

小出 楓

「あどけなさの残る顔と引き締まった体」

大島 雪：

「この説明が終わったら、すぐに始まるよ 全部、貴男だけの物 是非 私達と一緒に、最後

まで・・・ もう、準備はできた？」

TRUCK 2 PLAY

大島 雪：

「おじさんのオチンチン 手でしごいてあげるね 見て ペええ」

大島 雪：

「オチンチン、雪のヨダレでドロドロだよ」

松前 空：

「・・・ ン ん？ あれ 私、いつのまに寝ちゃって 真っ暗だ 今何時だろ？」

大島 雪：

「先生 先生起きて下さい」

松前 空：

「んっ 雪さん 私、どうしてソファーなんかで まだ、頭が冴えなくて ごめんなさい」

小出 楓

「先生 おはようございます」

松前 空：

「楓さんも あ今って 」

高松 響：

「大丈夫よ先生 まーだ、お日様は出てるから ほらね」

松前 空：

「うつまぶしっ 響さんも あのレッスンって、終わったんでしたっけ え な 何してるんですか その格好 三人で何して」

高松 響：

「あら、三人じゃないわよ先生 ここに、もう一人 殿方が 」

松前 空：

「何言って いやああああ！！ 誰 何なんですかこの人！ 私の家で何やってるんですか これは、これは、どういうことですか？！」

大島 雪：

「このおじさんは、雪達のお友達」

小出 楓

「そして、先生の大ファン」

松前 空：

「私のファン？ 意味がわかりません 早く追い出して下さい！ そんな人！」

高松 響：

「まあ、ひどい、可哀想に、ほら、こっちへ」

松前 空：

「来ないで下さい！ 服着て 変なもの見せないで！！」

大島 雪：

「変な物なんて美味しいチンチンなのに あむ 見て先生」

松前 空：

「雪さん、何やってるんですか」

高松 響：

「何ってねえ チンポをしゃぶってるのよ？ こっちにも来なさい ハァ 貴方 亀頭は好き？ しょっぱい」

松前 空：

「そんな事聴いてません やだっ こっちに・・・ 顔に近づけないで 嫌！」

大島 雪：

「たかがフェラチオですよ先生？ まさか経験無いなんて事ないよね？ よく見ると可愛いんだよ 我慢汁がドバドバ出てて」

松前 空：モノローグ

「あれ 立ち上がりたいのに 体が動かない 力が入らない どうして」

高松 響：

「あら、もう出るの？ 相変わらず早いよね貴男 いいわ、お口に出しなさい んっんブッ濃いわ 溜めてきたのね 偉いわ」

松前 空：

「気持ち悪い 頭おかしい 待って、来ないでやだっ辞めてっんっんん！！んっうんん！！うえっうっおうえ」

高松 響：

「先生可愛い 舌、柔らかくて気持ちいい」

松前 空：

「んっうん——！！」

大島 雪：

「美女から美少女へのザーメンリレー それみておじさんも賢者タイムなんて忘れて興奮しちゃうよね いいよ 先生のどこが嗅ぎたいの？」

高松 響：

「貴男いい趣味してるわねえ 先生 先生のムレっムレっおパンツが嗅ぎたいんですって」

松前 空：

「やめてっ！ 離してほんとに止めて 嫌！ 来ないでっ」

大島 雪：

「ほら、先生の汗だくパンツに、知らないおじさんの顔が埋まってるよ」

松前 空：

「いやぁ もうやめて 気持ち悪い 説明して下さい 何なんですかこれ ウッ・・・やだ うっあ」

高松 響：

「先生と遊びたいだけよ」

高松 響：

「先生っていつもカルパン なんちゃらの下着よね どうして？」

松前 空：

「そんなのどうでもいいっ 早くどいてっ」

大島 雪：

「この下着って灰色だから、お汁で濡れると、黒くエッチですよ」

松前 空：

「早く説明して 誰なんですか貴男 もう離れて っぁうんッ」

小出 楓

「知る必要なんて無いのよ 貴男、今度はこっちから ここに ほら、寝なさい」

松前 空：

「何 痛いっ！ 髪、引っ張らないで 痛いっ ンンッうう！！」

高松 響：

「凄いわね そんなに仰け反って喉の奥まで咥えこんで」

小出 楓

「雪さんご存知？ 喉ボコっていうのよコレ」

大島 雪：

「ほえー、初めて見ました 口と喉が一直線になるから、奥まで入るんですねー」

高松 響：

「先生の喉に ここに、チンポが入ってるのがくっきり見えるわね」

松前 空：

「・・・ンンッうううえうっぐぶっうあ うえうえだずげっごふおっ！ ぐふつお！おう」

大島 雪：

「おじさん、遠慮しないで、先生の中に出していいよ」

松前 空：

「ンンッん！！ンッ んぶっおえンっんん！！ がああっんう！！」

松前 空：

「ぐふっ！ごふおっあ！ ハアアっあひどい ハアああハア 気持ち悪い おうえ」

大島 雪：

「可愛い顔が台無しだね (*´ω`*) v」

小出 楓

「ちゃんと飲まないで吹き出すから 顔が、胆汁と胃液と精液でドロドロじゃないの 自業自得よ」

松前 空：

「助けて もうやめてください」

高松 響：

「まだ始まったばかりじゃない？ 先生の汗だくな体 凄くエッチよ クリチンポが膨らんで来ちゃう」

松前 空：

「あの、勘違いされてるかもですけど 私 女性に興味ないです だからこういうのは」

小出 楓

「先生こそ勘違いしていますわ ノンケだから面白いのよ」

松前 空：

「ノンケ？」

大島 雪：

「同性を性的対象としてみていない人の事、先生みたいに」

高松 響：

「貴男もそうよね？ 男なんか抱きたくないでしょ？ 抱きたいのは、空ちゃんみたいな綺麗な女の子よね」

松前 空：

「さっきから、この人誰なんですか」

大島 雪：

「んー エッチな事が大好きな変態さんかなあ？ だから、先生ほら、バンザーイ、万歳ですよお」

松前 空：

「えなに 雪さん手離して」

大島 雪：

「汗でじっとり濡れた脇 綺麗に処理されてる べええ しょっぱくて美味しい」

松前 空：

「あっあ やめっ 舐めないで こんなの可らしい こんなの絶対変です っっあ あっああう 脇やだ」

大島 雪：

「雪的には、先生みたいな可愛い子が、ワキガとかでも嫌いじゃないけど 先生の汗いい匂い」

高松 響：

「こっちは私が舐めてあげる」

松前 空：

「何するんですか 止めてっ うっあうう うっ」

松前 空：

「くっっあう ダメッ っあ ソコ変うっう」

小出 楓

「そこは副乳よ、脇の下には乳首みたいに気持ちいい場所がたくさんあるの 先生の準備が出来るまで 私は貴男のイチモツを」

小出 楓

「ハアハア ビクビクしちゃって可愛い 先生のエッチな姿に興奮しちゃったのかしら」

松前 空：

「アはうああっ！ やだやだっもうヤダ いっいやあ」

小出 楓

「女の子の胸や脇^{わき}を堪能しながらのフェラチオ、もっと肉棒^{にくぼう}を勃起^{にきく}なさい」

高松 響：

「ここはスぺンス乳腺^{にゅうせん}って言うのよ こっちはもっと凄いのよ」

大島 雪：

「ハアっあ先生のおっぱい 美味しい あれ、先生下着がぐっちょりだよ」

松前 空：

「違うっ」

小出 楓

「ハア美味しい あら、ホント、先生のおメコ、愛液だばだば 濃くていい匂い」

松前 空：

「嗅がないで！」

高松 響：

「こっちはどうかしら もう少しで勃起乳首かな？」

松前 空：

「ひゃっあう」

大島 雪：

「ひゃうなんて先生 かわいー あ、その顔、激おこぷんぷん丸^{げき}？ おっぱい美味しいよ 一生チュパチュパしたい」

松前 空：

「意味わかんない　っあ　　はあア　今の何っ」

大島 雪：

「何って、先生の乳首をペロペロしただけですよ？」

高松 響：

「雪の舌って凄く気持ちいいでしょ　貴男も大好きよね　乳首舐め　ハア　乳首気持ちい？
男の匂い」

小出 楓

「アソコと乳首を同時に舐められて　肉の棒がギンギンになっちゃったのね　もう挿れたくて仕方ない？」

松前 空：

「雪さん　駄目っ舌うつア・・・う　　はあうあアっ♥」

松前 空：モノローグ

「やばい、これ、本当に我慢できない」

大島 雪：

「先生の乳首尖って来たよ　もっと舐めちゃいますね　美味しい　乳首ウマウマまいうー」

松前 空：

「待っていつあつう　　いっちゃダメッ　んつあううつああ　ハアハア　なんで・・・胸
なんかで」

大島 雪：

「先生がお付き合いした人ってみんな下手くそだったんですね　この・・・雪の舌で簡単に
逝っちゃうなんて　先生ってチョロ可愛い」

松前 空：

「そんな事ない　アハアっあハアハア」

高松 響：

「ほら、貴男、チンコはそのまま、こっちきて、空先生もこっちを見て」

松前 空：

「なんですかア あう」

高松 響：

「先生の顔の真横で、見せてあげようと思って 大人のフェラチオって奴」

松前 空：

「そんなの見たくないっ いいっ」

高松 響：

「だめよ、これから貴方の中に入るんだから 私の口にチンコが入る様子を見て 先生のマ
ンコにコレが入っていくのを想像しながら」

松前 空：

「誰がそんな事・・・」

高松 響：

「舌で絡め取るように貴方のチンコってほんとに美味しい すっごいエッチで臭い^{くさい}臭くて、
大好き♥」

高松 響：

「先生見える？ チンコの先っぽの穴ここからザーメンがドピュって出るのよこの、玉々^{タマタマ}で
精液を作って、精管^{せいかん}を通して、先生の子宮の中に送り込まれるそれがセックス」

小出 楓

「私の口も見なさい フェラチオは喉の奥まで入れるのがマナーなの 凄い臭い」

大島 雪：

「あ、だあめ 先生は、こっちだよ 雪の乳首なめに集中して」

松前 空：

「えもう終わったんじゃ つあんツハアあ 別につ んっあ こんなはどうってこと」

高松 響：

「舐めてるだけで、マンコとろとろになっちゃう 先生も今頃その 下着の中は」

大島 雪：

「灰色パンツに真っ黒なシミが出来てるよ 先生」

松前 空：

「嘘っ」

大島 雪：

「だってほら 先生のおまんこグジュグジュだよ ビッショビショっていうより、ネッチョねちょ！」

松前 空：

「やだっ下着の中に、手」

小出 楓

「あら、フェラされる肉棒にくぼうに興奮しちゃったのかしら？」

松前 空：

「違うっ 雪さん、指ぬいて っあうう ああつあうう！ダメッ 無理 ソコ駄目っ！」

大島 雪：

「Gスポットがあんまりザラザラしてないタイプで 横の壁が」

松前 空：

「んっうああっ♥ あっあう やっうっあ 声があああ」

大島 雪：

「すごく敏感で」

高松 響：

「貴男も出そうなの？ いいわよ私のお口に出して 出して ンッ」

小出 楓

「響さん、私にもフレッシュなザーメン分けて下さる？」

高松 響：

「べええ 見て先生」

小出 楓

「はぁハア やだ、こぼれちゃう いっぱい、濃い、ザーメン美味しい」

松前 空：

「見たくない どうでもいい 指動かさないでっ うぁっうんっ 逝くっぁ うぁ いっ ン」

大島 雪：

「あ、ここだ ここでしょ？ 先生？」

高松 響：

「また逝かせてもらえて良かったね 空ちゃんおいちいミルクのおすそ分けよ お口開けまちょーね」

松前 空：

「やっぁあんんっんっうぁぁ！ え何またっやだっんっんん！！んっん！ ン————！！」

松前 空：モノローグ

「気持ち悪くてどうにかかなりそう無理やり飲ませようと、舌で押し込んでくる」

小出 楓

「ハアっハア 先生飲んで 飲みなさい空」

小出 楓

「吐き出せば最初からよ 飲んで飲みなさいよく嚙んで、味わうの」

松前 空：

「ハアっぁハアっ …… あハアハア」

高松 響：

「良い飲みっぷりね 私と楓さんの口の中でシェイクされたザーメンカクテル お味はいかが？」

松前 空：

「うっう ああの 私が何か失礼をしたから こんな事されてる訳じゃ ないんですよ」

小出 楓

「ええ、みんな大好きよ。先生のヨガ教室」

大島 雪：

「どうしてそんな事聞くの？」

松前 空：

「だって、原因があるなら、謝罪すればって思ったんですでも違うなら ただ、私は皆さんの」

高松 響：

「そう。おもちゃよ。ただそれだけ。 それ聞いてどう思った？」

松前 空：

「控えめに言って絶望です」

高松 響：

「それでお味は？」

松前 空：

「クソ不味いに決まってます」

大島 雪：

「オマンコに指挿れられてるのに、そんな怖い顔ができる先生、大好き 壊したくて仕方ない ここが気持ち良いんだよね？」

松前 空：

「っああうっあ 違うっもうっ感じたくない あああっあああう とめっ いじんじゃないでっ
ああやだいいあいあああっ」

小出 楓

「まあ、貴男、もう大っきくなっちゃったの？ 空のエッチな喘ぎを聴いて、元気になったのね あと一回 先生が逝ったら 挿れちゃおうかしら」

大島 雪：

「G スポットはトーントンってノックするみたいに するとね 先生のおまんこ きゅっきゅって喜ぶんだよ」

高松 響：

「空ちゃ〜ん もう我慢の限界でちゅね 逝っちゃいなさいよ ほら、逝っちゃえ」

松前 空：

「だめっ 逝くっ 逝くっうああ！ アッうああ ア ハア・・・はあっ なにこれ・・・なんで あつあううつ」

小出 楓

「アッハハハハハ 派手に逝ったわね」

松前 空：

「っ見ないで」

大島 雪：

「えへへ、先生かわいいー 雪の体、先生のおまんこ汁でビッショビショ」

高松 響：

「あーあ、雪にお潮ふかされちゃったね 空ちゃん」

松前 空：

「し潮？」

小出 楓

「あら、初めてだったの？ よっぽど、下手で、無能な、ゴミみたいな恋人たちだったのね」

大島 雪：

「先生ね、怖がりさんだから、オナニーの時にも入り口の周りしか弄らないんだよ」

松前 空：

「なんでそんな事っ」

大島 雪：

「全部わかるよ 童貞彼氏に、高２かいや、高３の時くらいかな なし崩し的に押し切られて処女を失って、それが痛くて痛くて ねえ、先生ってSEX嫌いでしょ？」

大島 雪：

「何度だって逝かせられるし もう簡単に吹かせられるし 雪の事は怒らせないほうが先生のためだよ だから暴れないで」

高松 響：

「アンタ、最初は正常位から、入れてあげて・・・ほら、オチンポ様が空のオマンコにズボリ。ずぶーって飲み込まれてくよ」

松前 空：モノローグ

「体に力が入んない」

松前 空：

「お願いっ いやっ それだけはいやっ いやっああ！！ かつあ 入ってあああ・・・ やだ ああ・・・あ・・・」

小出 楓

「大丈夫よ 痛くしないから 最初の３０秒は動かずになじませるの 空のオメコが、この人のイチモツの形に変わっていくのがわかるかしら？」

松前 空：

「どういう意味」

大島 雪：

「先生の恋人って、挿れたらすぐ動いて、すぐ出しちゃう 童貞チンポだったんでしょ 激しいのが気持ちいと思ってる 生ゴミみたいなチンチンばかりで」

松前 空：

「んっうあ 中でおっきく なって」

小出 楓

「逆よ、空のオメコがきゅうーって締め付けてるのよ」

高松 響：

「空ちゃんのおまんこぎゅうーぎゅうって押されちゃってるね 空ちゃん、気持ちいい？」

松前 空：

「こんなの気持ちよくない」

小出 楓

「そろそろ、ゆっくり動いてみようかしらね 貴男」

松前 空：

「ええっ？ ああっああう 擦れてる なにこれっやばっ ン やばい んっあ 内側えぐられてる ああっあ 」

高松 響：

「すごい甘い声でちゃってるね？ 空ちゃん」

小出 楓

「カリが壁をひっかいて、愛液と一緒に掻き出されているのが分かる？ 空のおメコが喜んでるのよ」

大島 雪：

「ほら、おじさん、もっと奥に押し込んで 雪が乳首いじってあげるから オチンチンカッチカチにしててね」

松前 空：

「あっああ 奥に当たって やっぱうあ これっあつあ」

大島 雪：

「凄い痙攣してる 雪に潮ふかされて逝ったばっかだもんね 先生 子宮の入り口トントンされて気持ちいい？」

松前 空：

「気持ちよくっああ動いちゃだめうつああっうあああつ」

大島 雪：

「おじさん 雪ともチューしよう 舌先と舌先でエッチしよ 雪の舌きもちい？」

松前 空：

「だめっこれっやばいうあハアア はああっああおちんっ」

高松 響：

「今、オチンって ツハハハ！ 全然良いのよ 自由に言葉にきなさい 快楽は言語化することでもっと気持ちよくなれるから」

松前 空：

「違う 抜いてって言おうとしただけっ んっあああ あっうそこだめ 当たってる んっう逝くっうっうあ」

小出 楓

「一度、軽イキしたら、もう終わりね 抗えないのよ 空は今 嫌なことをされてるんじゃないの 世界で一番 気持ちいいことをされているのだから」

高松 響：

「ねえ、アンタ、私ともキスして 空ちゃんの中に白くて熱くて臭いの出してあげて」

松前 空：

「だめっ 中は駄目 いやっあ出さないでお願い えこれダメッでてるやだっ、抜いてできちゃう 赤ちゃんできちゃう」

大島 雪：

「大丈夫だよ先生 雪たちはプロだから」

高松 響：

「今まで何人の女の子を幸せにしてきたと思ってるの？」

松前 空：

「だって、奥にでてるいっぱい 奥に入ってる感じするもん 妊娠しちゃう 早く洗わないと」

小出 楓

「そんな事よりどう？ 中で感じる精子は」

松前 空：

「そんな事って」

小出 楓

「良いから。 答えなさい 空」

松前 空：

「・・・あ熱いです」

高松 響：

「どこが？」

松前 空：

「お腹の奥が 熱いです」

大島 雪：

「先生のおまんこ、たっぷりザーメンでグツグツしてるんだね」

松前 空：

「早く抜いて」

小出 楓

「何言ってるの？ ここからじゃないの」

松前 空：

「え ツあぁう・・・なんでっ抜いて、動かないでっ！」

松前 空：モノローグ

「逝ったのに、中に出したのに 抜かないでそのままなんて」

松前 空：

「うわっあなに あっあ待って抜いてよっ」

高松 響：

「ここからは騎乗位だね 空ちゃん」

大島 雪：

「下からガンガン突かれるの気持ちいよね わかるよ」

松前 空：

「んっあ 深いっ あつう おうう うわっあ 奥 やばいこれやばい」

松前 空：

「待って 駄目 奥 奥がっ ンッ 逝くっ 無理 やばっ あっ ンッ ンッううあうううあ
ソコっ そっちもあ やばい」

小出 楓：

「中に出した精子が潤滑油じゅんかつゆとなって、滑りを良くしているのね 深く刺さって もう抜けな
いんじゃないくて？」

松前 空：

「奥っ ドンッって やらないで 逝くっこんなの 逝っちゃう うっうああ 逝ったばっか
なのに なにこれ奥が・・・重いどうしよずっと逝ってるみたい」

大島 雪：

「それが『中イキ』だよ先生 ヨガの先生だから体が柔らかくて、股関節が開くから普通の
女の子よりも奥に当たるの 先生のおマンコってね 雑魚マンコなんだよ」

松前 空：

「違うっ わか んない どういう事 まだ 逝ってる 逝って るのに 動かないでっ そんな
のまた逝くっああああ！」

高松 響：

「先生のマンコの中でチンコがザーメンをかき混ぜて、ぐっちゃぐっちゃ凄い音だよ 下品
で空ちゃんの顔に似合わない 素敵な音」

小出 楓

「もっとペースをあげてみる？ オメコが気持ちよくてもう限界なんでしょ？ 声に出して
良いのよ 頭の中まで貫かれてるみたいでしょ 全身オメコの完成ね」

松前 空：

「あっ う あ お うあ ハア あ かつ うっ ア ア ハア ダメッ 待って 止めて う う あ
はう♥ うああ♥」

大島 雪：

「すごいピストンエグいくらいのストローク オチンチンの根本から、先っちょの方まで
一回 一回見えてるよ オマンコ全部 使われてるね」

松前 空：

「はっあはあっうあっ 奥 奥に もう うあああ 逝くっ 逝ってる 逝ってるから んっあ
あう♥」

高松 響：

「精子がメレンゲみたいになってる 硬いチンコに串刺しにされて、嬉しい？」

松前 空：

「うっあッ おっ おうっっ あうっ うれっ しく・・・ おおおお♥ ヤバイ・・・ やばす
ぎっ うううう アあああ・・・」

小出 楓

「まだ出るわよね？ アクメ中のオメコに追加ザーメンでトドメを刺しちゃって」

松前 空：

「逝くっ逝き すぎてわけっわかんにやいおおおおううだす？ マタ？ もう無理 ださ
ないでっ」

松前 空：

「っああアあ・・・ううもうだめ限界むりい・・・」

高松 響：

「もう、暴れるからチンコが抜けちゃったじゃない」

大島 雪：

「先生のオマンコからザーメンドロドロ凄いでてるソファァーがぐちょぐちょだね」

TRUCK 3 END

松前 空：モノローグ

「それから、私は何度も逝かされて、全身を4人に犯された 訳がわからないまま、淡々と
続いていく挿入絶頂、中出しそして体位を変えて、また挿入」

松前 空：モノローグ

「あの男が水を飲みに行ったりする間も、三人が私を休ませてくれなくて」

松前 空：モノローグ

「好きな人にしてもらうタイプの前戯とは別のもっと、効果的で、私が絶頂を迎えるまで
の最短の方法を探っているみたいな残酷な愛撫だった」

松前 空：モノローグ

「それから、私自身が、敏感だとも、気持ちいいとも思わない未知の場所を時間をかけて、
試行錯誤しながら、反応を確かめる」

松前 空：モノローグ

「でも、もう1時間くらいしてから状況は変わった」

松前 空：

「ハアアっ もうっ休憩させて」

高松 響：

「・・・そうね、仕方ないから休憩させてあげる」

松前 空：

「ほんとに？」

小出 楓

「良いわよ 空はそこで休んでいなさい その間貴方は私達と もっと唾液飲ませて」

高松 響：

「楓さんとばっか、ずるいわ、私とも 私にもアンタの口内汁を恵んで」

大島 雪：

「おちんちん いただきまあ〜す」

高松 響：

「楓さん私、先に挿れていいですか？」

小出 楓：

「ええ、いいわよ」

大島 雪：

「ハァハァ 響さん誰も触ってないのに、オマンコとろとろですね」

高松 響：

「空ちゃんが犯されてる顔が可愛いんだもん あっくらっ 雪アンタ、いきなり おほっあ
う ああああおおお」

大島 雪：

「ハァハァ 響さんの愛液で雪の顔が」

小出 楓

「あらやだ、響さんのオメコと雪さんのお顔が糸で繋がってしまったわね」

高松 響：

「勝手に舐める雪が悪いのよ アンタのチンコで私のマンコもっとグチヨグチヨにして
おおおうつう」

高松 響：

「いいっおおおおお 気持ちいいよ、凄くいい オマンコの奥にチンポキス決めて、
飛ばしてチンコで記憶飛ばして 口開けなっ」

高松 響：

「ハァハァ・・・ 口まんこも犯して ハァチンコ気持ちいい オマンコ掻き回して」

小出 楓

「雪さんも一緒に」

大島 雪：

「おじちゃんもっと、舌出して」

高松 響：

「四人で一緒にペロセックスでドロドロになりましょう」

大島 雪：

「舌きもちい」

小出 楓

「べええ」

高松 響：

「キス気持ちいペロエッチぶっ飛ぶオマンコ気持ちい オチンポ大好き！！ きもちい！」

松前 空：モノローグ

「気持ちが悪い 吐き気がするまるでアレみたい なんだっけあれ、あ、ドクターフィッシュだ もしくは飴に群がる蟻かな」

松前 空：モノローグ

「3 人は何度も何度も交代して、すぐ隣で横になってる私が、この場に居ないみたいに 真横に私がいるのも気にしないで、4 人で盛り上がった」

松前 空：モノローグ

「私が見たこともない格好で 4 人がひとつの生き物みたいにエッチをしてる いろんな体液が寝ている私に飛んでくる早く終わって欲しい」

松前 空：モノローグ

「私の家なのにいつまでこんな事やって 3 人で一本を奪い合って、醜くて、下品で気持ち悪くて、ムカつく ここは私の家なのに」

大島 雪：

「ハアっあっあ おじちゃん雪のオマンコ舐めて そしたら雪もおじちゃんの」

松前 空：

「いい加減にして下さい！！ いつまでこんな事してるんですか ここをどこだと思ってるんですか」

松前 空：

「4人でもう何時間 お気に入りのソファーも駄目になっちゃってるし それに、もう、私に何もする気がないなら、帰って4人ですればいいでしょ」

小出 楓

「ないがしろにされて怒っているの？」

松前 空：

「別に」

高松 響：

「混ぜてほしいのかしら」

松前 空：

「そんな訳無いじゃん」

高松 響：

「あれ、そう言えばさぁ・・・アソコってまだ試して無いわよね？」

小出 楓

「そうね、先生口を開けてくださる？」

松前 空：

「だから ほっといてよ 帰って 勝手にそっちで 嫌」

小出 楓

「そんな事言わないで？ じゃあ、ここを最後にして、終わったら帰ってあげるから」

松前 空：

「ほんと？」

高松 響：

「ビクビクして、怯えちゃって可愛そう そうそう最後だから頑張って 空ちゃん」

松前 空：

「まあ、最後なら・・・」

小出 楓

「口をあけなさい」

松前 空：

「っ、アあ」

小出 楓

「コレはきっと男の指の方がいいわね 貴男先生の口の、上の歯の裏側を、そーっと指先でなでてみて」

松前 空：モノローグ

「上顎なんか、胸や下半身を散々弄られた後でなんとも無いと思ってた」

大島 雪：

「じゃあ雪は、クリトリス」

高松 響：

「私はバックハグからの両乳首」

松前 空：モノローグ

「三人はニヤニヤしながら、私の口の中に指が入るのを見ていた クリトリスも乳首も気持ちが良いだけだから、別に好きにさせてもいいかなって思った」

小出 楓

「そっと、優しく、こすってみて 空の舌の表面を指で撫でながら、^{うわあご}上顎をくすぐるの」

松前 空：

「！？あっふあうあッ！！ ふあっあア」

松前 空：モノローグ

「撫でられた瞬間に、くすぐったいような、強い感覚がして、全身の鳥肌が一斉に立って、ゾクゾクゾクって全身が騒ぎ始めた」

小出 楓

「思った通り、むしろソレ以上ね」

大島 雪：

「空先生 これはまだ始まってすら居ないですよ 口が閉じられないから、唾液がドバドバダラダラ」

高松 響：

「空ちゃんみたいなタイプは絶対、弱いと思ってたのよ」

小出 楓

「始めましょうか 上顎を撫でる指と」

大島 雪：

「同時に、クリトリスを雪が」

高松 響：

「両方の乳首を私が同じように弄ると みんないい？ 3・・・2・・・1」

松前 空：

「アッ アッああッああ!! っあ 何これ 待ってっ っっうああ」

小出 楓

「暴れるんじゃないよ小娘」

松前 空：

「いっあッ 髪を ああッあ” 痛ッ」

小出 楓

「暴れて快感を逃がそうなんて、小癪なことするわね 次はちゃんと耐えて終わらないわよ」

松前 空：モノローグ

「楓さんの雰囲気が変わって、ソレに合わせて、雪さんと響さんの目も、怖いくらいの笑顔になっていた もともと、動けなかった体はもっと、抵抗できなくなった」

松前 空：モノローグ

「名前も知らない目の前の男の人の指に、上顎を撫でられる度に、体が弾けるみたいに反応させられて、同時に胸と下半身の敏感な部分を弄られると」

松前 空：モノローグ

「全身の感覚が繋がっているような錯覚を覚えて ソレはだんだん麻痺して行って、最後は上顎しか触っていないのに」

松前 空：

「アッンッ！逝くっあうう！！！」

小出 楓

「本当に口の中だけで逝っちゃうなんて、空先生って変態さんね」

高松 響：

「これでキスでも逝かされるようになったって気がついてる？」

松前 空：

「キスで？」

大島 雪：

「もちろん、フェラでも逝っちゃいますよ」

松前 空：モノローグ

「自分の体が変わられていく恐ろしさに、私は気が遠くなっていった」

小出 楓

「じゃあ最後に イラマチオされて逝かなかったら 終わりにして帰ってあげる」

大島 雪：

「先生頑張って」

松前 空：モノローグ

「いまさら啜えるくらい何も抵抗がなかった」

高松 響：

「ちゃんと玉裏まで舐めてね」

松前 空：

「いちいち言われなくても解ってる 毛が口に・・・変な味する」

大島 雪：

「根本から先っぽまで丁寧にだよ」

松前 空：モノローグ

「こんなの下らない早く終わって欲しい」

松前 空：

「これでいいでしょ 鼻が可笑しくなりそう」

小出 楓

「空 上手よ 肉棒全体に舌をこすりつけるように見違えるように上手になったわ」

松前 空：

「あ、ありがとうございます」

小出 楓

「早く終わりたいなら、喉の奥も使って、根本まで押し付けるようにするといいわよ」

松前 空：

「根本までですか？ はい ハアあむ あの あんまりこっち見ないで下さい ちゃんとオチンチン舐めますから」

松前 空：モノローグ

「思ったより苦しくない 楓さんのアドバイスのおかげかな」

大島 雪：

「おじさんすごい顔してるね」

小出 楓

「口は開けたまま唇で竿に、はむ、はむってタッチするように」

松前 空：

「ハアおっうアうあ うぶっおうふん」

高松 響：

「もうすぐ逝きそうみたいね」

小出 楓

「じゃあ、今日のフィナーレとして 全部出してあげて空の口の中に」

松前 空：

「え、なっ」

松前 空：モノローグ

「頭を掴んで急に激しく玩具にされてる道具みたいに扱われて これ・・・オチンチンの先で上顎をこすられてる あ。これ、駄目な奴だ」

松前 空：

「いっおうえおぶっ いっういあう」

松前 空：モノローグ

「逝かされる本当にしゃぶってるだけで逝く・・・」

松前 空：

「ンッんん！！ ンッうんん！！ ふっあああ！ ダメッ無理っ」

高松 響：

「あ、射精してる時に口から離したら」

松前 空：

「きやアっあああう」

大島 雪：

「あーあ 顔射されちゃった」

松前 空：

「うっぷっ顔につうつあ止めてっかけないんつうあ ちょっと、手を離してっ」

小出 楓

「駄目よ空」

松前 空：

「早く ティッシュ タオル」

小出 楓

「ちゃんと、どんな匂いか味なのかを伝えるまで、それがフェラチオでしょ？ そうよね 空？」

松前 空：

「匂い」

松前 空：モノローグ

「楓さんに言われて、私は自分の顔にかかっている精液の匂いを嗅いだ 嗅いじゃった 思い返すとそれが一つのターニングポイントで、私が犯した間違いだった気がする」

松前 空：

「生臭くて嗅いでると、頭がぼおっとしてきてふわふわして んふっ すごい濃くて エッチで」

松前 空：モノローグ

「鼻に入ってきた精液の匂い 唇についたザーメンの味 すぐに3人がそれに群がってきて、私の顔も、口も 全部舐め取られていく」

大島 雪：

「先生舌だして雪にも味を感じさせて 先生のキス、変態さんのキスになったね唾液ってオマンコ濡れるよね」

高松 響：

「空ちゃんのザーメンシャンプーされちゃった髪の毛 後でお風呂で洗ってあげるからね オマンコもクリトリスも綺麗にしてあげる よく頑張ったね」

小出 楓

「空あの鏡を見なさい 今 どんな顔してる？」

BONUS TRUCK 4 公式「MAD」『もしも、先生が貴男だったら』

(本編の音声を切り刻んで再編集を行い、本編とは全く別の STORY へと変化させた「MAD」です)

大島 雪：

「灰色パンツに真っ黒なシミが出来てるよ先生」

高松 響：

「先生と遊びたいだけよ」

大島 雪：

「あ、ここだ… ここでしょ？ 先生？」

小出 楓

「ハアハア… ビクビクしちゃって可愛い…」

大島 雪：

「だってほら… ネッチよねちょ！」

高松 響：

「まだ始まったばかりじゃない？ 先生の汗だくな体… 凄くエッチよ… クリチンポが膨らんで来ちゃう…」

大島 雪：

「この下着って…灰色だから、お汁で濡れると、黒くエッチですよね…」

小出 楓

「まあ、^{アナタ}貴男、もう大きくなっちゃったの？」

大島 雪：

「んー エッチな事が大好きな変態さんかなあ？ だから、先生ほら、バンザイ、^{ほんざい}万歳ですよお」

高松 響：

「もう少しで勃起乳首かな？」

大島 雪：

「すごく敏感で…」

大島 雪：

「雪が乳首いじってあげるから オチンチンカッチカチにしててね」

高松 響：

「こっちは私が舐めてあげる…」

大島 雪：

「汗でじっとり濡れた脇^{わき}… …べええ… …しょっぱくて美味しい」

小出 楓

「ハア…美味しい… …濃くていい匂い…」

大島 雪：

「おっぱい美味しいよ… …一生チュパチュパしたい」

小出 楓

「もっと肉棒^{にくぼう}を勃起なさい…」

高松 響：

「雪の舌って凄く気持ちいいでしょ アナタ 貴男も大好きよね… …乳首舐め …ハア… …乳首気持ちいい？ 男の匂い」

大島 雪：

「雪的には、先生みたいな可愛い子が、ワキガとかでも嫌いじゃないけど… …先生の汗いい匂い…」

高松 響：

「私はバックハグからの…両乳首…」

小出 楓

「アソコと乳首を同時に舐められて… …肉の棒がギンギンになっちゃったのね… …もう挿

れたくて仕方ない？」

大島 雪：

「先生の乳首尖って来たよ…もっと舐めちゃいますね 美味しい 乳首…ウマウマ…まい
うー」

高松 響：

「ほら、貴男^{アナタ}、チンコはそのまま、こっちきて、……」

高松 響：

「何ってねえ… チンポをしゃぶってるのよ？ こっちにも来なさい …ハア… 貴方
亀頭は好き？ しょっぱい…」

大島 雪：

「…ハアっあ…先生のおっぱい 美味しい… 」

高松 響：

「舌で絡め取るように… 貴方のチンコってほんとに美味しい… すっごいエッチで臭い^{くさい}
…臭くて、大好き♥」

大島 雪：

「あ、だめ 先生は、こっちだよ… 雪の乳首なめに集中して」

高松 響：

「先生見える？ …チンコの先っぼの穴…ここからザーメンがドピュって出るのよ…この、
タマタマ^{タマタマ}で精液を作って、精管^{せいかん}を通して、子宮の中に送り込まれる…それがセックス」

小出 楓

「…凄い臭い…」

大島 雪：

「先生ってちょ口可愛い」

高松 響：

「舐めてるだけで、マンコとろとろになっちゃう…」

高松 響：

「…先生可愛い… 舌、柔らかくて気持ちい」

大島 雪：

「…エグいくらいのストローク… オチンチンの根本から、先っちょの方まで 一回 一回見えてるよ」

高松 響：

「もう我慢の限界でちゅね…逝っちゃいなさいよ… ほら、逝っちゃえ…」

大島 雪：

「えへへ、先生かわいいー 」

大島 雪：

「おじさん… 雪ともチューしよう…舌先と舌先でエッチしよ… 雪の舌きもちい？」

高松 響：

「あら、もう出るの？ 相変わらず早い^{アナタ}のね貴男…」

小出 楓

「まだ出るわよね？」

高松 響：

「精子がメレンゲみたいになってる…」

小出 楓

「何言ってるの？ ここからじゃないの」

大島 雪：

「ここが気持ち良いんだよね？」

小出 楓

「暴れるんじゃないよ」

高松 響：

「すごい甘い声でちゃってるね？」

小出 楓

「暴れて快感を逃がそうなんて、小癪なことをするわね……終わらないわよ」

大島 雪：

「大丈夫だよ先生… 雪たちはプロだから…」

高松 響：

「もうすぐ逝きそうみたいね…」

大島 雪：

「先生…頑張って…」

高松 響：

「あーあ、雪にお潮ふかされちゃったね 空ちゃん…」

小出 楓

「アッハハハハハ… 派手に逝ったわね」

大島 雪：

「凄い痙攣してる… 雪に潮ふかされて逝ったばっかだもんね…先生 気持ちい？」

高松 響：

「また逝かせてもらえて良かったね」

小出 楓

「あら、初めてだったの？」

高松 響：

「ビクビクして、怯えちゃって可愛そう」

大島 雪：

「何度だって逝かせられるし… もう簡単に吹かせられるし… 雪の事は怒らせないほうが先生のためだよ だから暴れないで」

高松 響：

「四人で一緒にペロセックスで…ドロドロになりましょう」

小出 楓

「もっと唾液飲ませて…」

高松 響：

「楓さんとばっか、ずるいわ、私とも 私にもアンの口内汁を恵んで…」

小出 楓

「べええ」

大島 雪：

「先生…舌だして…雪にも味を感じさせて… 先生のキス、変態さんのキスになったね…」

高松 響：

「後でお風呂で洗ってあげるからね…よく頑張ったね」

小出 楓

「あの鏡を見なさい… 今 どんな顔してる？」

